

「コロナ時代を生きる」

2020年07月27日

新型コロナウイルスは世界中でパンデミック（感染拡大）を起こしている。7月25日現在、世界全体の感染者数は1551万9580人、死者数は63万3656人、日本では、感染者数は2万9687人、死者数は1008人と報告されている。止まることなく、感染は増加し続けている。日本は、コロナを抑え込んだ国と高く評価されていたが、今や、歯止めがかからない状態になっている。ピントの外れた、また、遅れた政府の政策が原因ではないか。

『週刊金曜日』は1289号で、「新型コロナ時代を生きる」というテーマで特集を組んでいる。一人4冊、25人が選んだ100冊の書評、女優の東ちづる氏と奥田知志牧師のインタビュー、思想家の白井聡氏と同志社大学大学院教授の岡野八代氏の論考を掲載している。二人の論考に共感したので紹介し、私の感想を書きたい。

白井氏は「資本主義の失敗をどう乗り越えられるか」と題して、下記のように論述している。サーズ、マーズ、そして今回の新型コロナと感染症の流行がたて続けに起こっている。これは、偶然ではなく、開発途上国における自然環境を犠牲にした経済成長の追求と関係がある。濫（乱）開発によって森林が切り拓かれ、森深くに潜んでいたウイルスが人間の生活圏に入り込むことによって、新しい感染症が次々に発生している。つまり、感染症の大流行はグローバル化の副作用として現れた南北問題の産物で「資本主義の失敗」から生じたものである。コロナ危機の起源が、自然環境を犠牲にした経済格差の不平等にあるとすれば、広がった危険が人々を脅かす仕方も、これまた不平等をもたらしている。テレワークが可能な職種と不可能な職種の間で、歴然としたリスクの高低差がある。不平等の歪みから生まれたコロナ禍は米国に襲い掛かり、コロナ感染者、死亡者は黒人に圧倒的に多発し、不平等を極大化している。現在、「経済か健康か、生命か生計か」と定式化した議論が交わされているが、米国、ブラジルなどは経済最優先路線を走っている。犠牲者が膨大に増えれば、「経済か、健康か」の問いのジレンマが立ち上がることになる。白井氏は、「資本主義の失敗をどうすれば資本主義によって乗り越えられるか」という問いを突き付けられていると言う。白井氏が分析するコロナの起源とコロナ禍の現実を首肯せざるを得ない。だからと言って、中国の強権的な共産主義体制がコロナを抑え込んだように、国民の人権、自由を抑圧する政治体制になることには、断固反対である。

岡野氏は「ケアされる人を中心とする新しい政治を求める」と題して、下記のように書いている。まず、安倍政権の的外れのコロナ対策に怒りを通り越し薄笑いしかしかでないと言い、「私たちの生に密接にかかわる活動や人間の条件のようなものに対する侮辱感と、社会生活に対する無知、そして社会的な特権者／権力者が陥りがちな傲慢さが凝縮されているからだ」と手厳しく批判している。人間は気遣いや注視、細やかな働きかけ、すなわちケアを必要としている。生まれてから死ぬまで、他者からのケアに依存する存在で、ケアする人がいないならば、人間社会は存続しない。コロナ禍を期に、エッセンシャル・ワークと言われる看護、介護はもとより、農業、ゴミ処理、清掃や運送業などの不可欠の営みが周知された。ところが、それらの仕事は、政治から遠い、奴隷、女性、二級市民、外国人などが担わされてきた歴史がある。ケアを受けながら、ケア労働を貶める人は「特権的な無責任者」で、この特権的な無責任を終わらせることから民主主義は始まる。誰もが受けているケアから経済、政治を捉えた岡野氏の視点は正鵠を得ている。特権的な人間と自惚れ、ケアの働きと実践に無知な人に政治を任せてはならないということである。